

＜無線綴じ本の修理＞(ホットメルト)

無線綴じの本のページがバラバラ外れてきた場合の修理については、その構造が種々あり、方法も種々ある。

まず、代表的なものについての修理方法については、『防ぐ技術・治す技術－紙資料保存マニュアル』(日本図書館協会 2005)p.75を参照してほしい。

他の方法として、「無線綴じ本の修理(三つ目綴じ)」(テキスト5-1)では、三つ目綴じによる修理を紹介している。ただし、これは三つ目綴じができるような本、すなわちノド部の余白がある程度(15ミリ程度以上)ある本である。それはノド部の情報が隠れてしまうからである。また、あまりぶ厚いと、開きが悪くなる三つ目綴じでは適さない場合もある。

そのため、ノド部の余白がなかったり、少ない場合の方法として「無線綴じ本の修理(鋸目綴じ)」(テキスト5-2)で鋸目綴じによる方法も紹介している。

ここではさらに簡便な方法を紹介する。それは、鋸目綴じと同様に再び接着剤で固め直す方法であるが、近年手軽に使える材料(ホットメルトシート)が入手できるようになったため、それを使用する方法である。

そもそも、ホットメルトは無線綴じの本に多く使われている接着剤である。高温で溶かして背に塗り固める。ホットメルトシートはそれをシート状にしたもので、大きさも本の背に合わせて切ることができる。

ボンドなどの接着剤が乾燥に時間がかかるのに比較して、ホットメルトは数分で乾くため、完成までの時間を劇的に短縮できるメリットもある。

しかし、強度は、三つ目綴じの場合に比べて格段に弱いことをあらかじめ認識しておく必要がある。特に本紙が硬い場合などは、またすぐに壊れる恐れもある。

また、貴重な資料や紙が劣化した資料に使用することは避けたい。

なお、資料によっては「かしわ製本」(テキスト9)の三つ目綴じに代わってこの方法を採用することもできる。



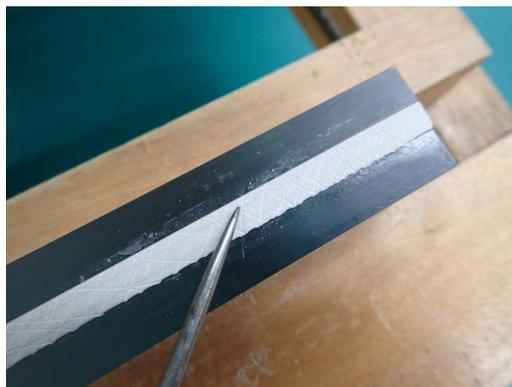
ホットメルトシート

【ソフトカバーで、表紙が紙など 180℃以上の高温に耐えられる場合】

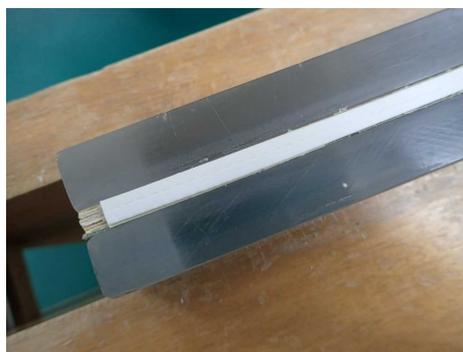
- ① 表紙の背から中身のページを外して、一枚ずつバラバラにする。
- ② 外したページに付着している接着剤の滓をきれいに削ぎ落とす



- ③ 本紙を板に挟んで仮固めする。
この時、背が滑らかでツルツルであれば、
目打ちなどで傷をガリガリ入れてから接着
剤で仮固めする。



- ④ 背(束)幅に合わせて「ホットメルトシート」を貼る(片面に接着剤がついているので剥離紙を取
るだけでよい)。
サイズは長さを本紙の天地より数ミリずつ
小さくするとよい。
(ホットメルトが溶けると広がってはみ出て
しまうので)



※ここからの工程は板に挟んだ本体が動かないように、製本締め機やクランプなどで、板
をしっかり挟んでおくとよい。

- ⑤ 表紙をくるんで、本紙の背(ホットメルトシート付き)と表紙が密着するようにして、再び製本締
め機などに挟んで、背側を上に向ける。
このとき、背を板から1ミリ程度飛び出させておくとよい場合もある。
- ⑥ その後、背にシリコン塗布紙(クッキング
シートなど)を被せ、上からアイロン(小型
のものが作業しやすい)を当ててホットメ
ルトを溶かす。
ホットメルトは170~180°Cで溶けるので
温度設定もその程度(中~高)にする。
ホットメルトが溶けて潰れたら、アイロンを
移動させ、背全体に溶かす。



- ⑦ 数分待つて冷めたらシリコン塗布紙(クッキングシートなど)を取り、資料を板から外す。
- ⑧ 今度は平を上にして置き、シリコン塗布紙(クッキングシートなど)を被せ、その上からアイロン
を当てる。
その当て方は以下の通りである。
- ・まず横(背)に当てる
 - ・そのまま平の方に傾ける
 - ・平に倒してそのまましばらく当てる
- ⑨ これを全体、反対側の平にも行う。



**【ソフトカバーで、表紙がビニールなど 180℃以上の高温に耐えられない場合】
【ハードカバーの場合】**

この場合は先の例のように表紙をくるんで直接ホットメルトで本体と接着することができない。

したがって、本体(本紙)部分のみをホットメルトで綴じて、表紙はあとから付ける(くるむ)ことになる。

まず、表紙の付け方についてであるが、

ソフトカバーの場合は、「無線綴じ本の修理(三つ目綴じ)」(テキスト5-1)あるいは、「かしわ製本」(テキスト9)を参考にしてほしい。

また、ハードカバーの場合は、『防ぐ技術・治す技術－紙資料保存マニュアル』(日本図書館協会 2005)p.72 を参照してほしい。

次に、本体(本紙)のみのホットメルトによる綴じ方であるが、基本的に先の工程①～⑨を行えばよい。ただし、表紙をくるむ工程⑤は除外する。

また、補強のため、⑤の工程で表紙をくるむ代わりに、背幅より左右5ミリ程度ずつはみ出るくらいの大きさの厚手の和紙を、背に貼ったホットメルトシート上に軽く糊止めしておくといよい。

【補足・元のホットメルトがまだ活かせる場合】

元のホットメルト接着剤が劣化していない比較的新しい本の場合は、新しいホットメルトシートを使用せず、⑤以降の工程で、とりあえず修理することもできる。